

なのはな

通信

No.31 2021.3



「あっちゃんと語る被爆体験」小谷孝子さん講演

新型コロナウイルスの世界的感染拡大、また日本全国への緊急事態宣言が出され、本校も6月までの臨時休校を余儀なくされました。入学式も行えない中、学生は困難や不安の中で居ても立ってもいられない思いで過したと思います。

6月1日、ようやく全校生、教職員と一堂に会することができました。ささやかながら26期生の入学を祝うことができ、この学校で、クラスの仲間とともに学びが始まりました。

感染対策の徹底が求められる中で思うように対面授業ができないこともありましたが、学生全員が時間を惜しむかのように意欲的に、そして積極的に学びに向かっていました。

コロナ禍の中でも、講師の皆様や臨床からの大きなご協力をいただき、東葛看護専門学校の教育理念をもとに学生の成長を応援してきました。

「3年間、患者さんに対して十分な応援ができず実習のたびに悔しくて情けない気持ちでいっぱいだった。しかし、実習を重ねるごとに目の前の患者さんの気持ちを大切に困難に寄り添い、その人らしい人生が送れるような応援をしていける看

護師になりたいと思うようになった。かかわってきた患者さんにはいろいろな思いや願いがあり、人生があった。患者さんと接しその生き方や物事の考え方など多くを学び3年間で自分の価値観が大きく変わっていったと感じる。」卒業発表で述べられた3年生のレポートの一部です。



校長 窪倉 みさ江

学生は、学校での学びと臨地実習で、必死に生き抜こうとする人間の力強さ、人間の回復力のすばらしさを実感し、社会や平和と人権そして医療者の役割にもしっかり目を向け、人としての成長も遂げています。

今もそして今後しばらくは、リモート授業や臨地実習の中止や縮小、学内でも学年を超えての交流などできない状態が余儀なくされますが、コロナ禍の後につくるべき社会に思いを馳せながら、様々な困難を励ましあって乗り越えていきたいと思っています。

学生と 共に歩んだ一年

1年生

26期生

担任

大井 涼

戸澤亜矢



26回ナーシングセレモニー

4月、入学式を目前に新たな出会い、夢だった看護師になる第一歩を踏み出せる喜びでいっぱいでした。しかし新型コロナウイルスの感染拡大により臨時休校となり、入学式は延期になってしまいました。学びが遅れるのではないか、3年間で卒業することができるのかなど不安に思っていました。ZOOMを使ったホームルームで、初めて仲間の顔を見て、この45人で3年間学んでいくのだなと思いました。一緒に授業を受ける姿を想像したことで、一度失いかけていたやる気を取り戻し、前向きに取り組もうと思いました。

5月に始まった看護総論の授業で『慢性疾患医療の捉え方』という資料を読み、糖尿病や高血圧、高脂血症などは生活環境が深く関わっていることを知りました。疾病観について考え生活習慣病は個人の責任ではないということを知りました。

交流研修では60歳代Tさんご夫婦の自宅に訪問し、お話を聞かせていただきました。

お話を聞く前は、病気を患うと痛みに苦しんだり、生活が制限されているというイメージを持って

いました。しかし、T氏ご夫婦の口からは「つらい」という言葉は一言も出てきませんでした。病気を患ってからも、お二人で1日1日を大切に生活をしていました。ご夫婦の生き方を見て「病気になること＝不幸せ」ではないと学びました。



足浴

9月、初めての臨地実習である基礎看護学Ⅰ実習に臨みました。60代男性のA氏は発熱がきっかけで入院された方でした。事前情報では日常生活動作が自立されている方と聞き、病棟内を歩くことができる患者さんを想像していました。しかし挨拶に伺うと、「腰が痛い、力が入らない」「歩けない」とベッドに寝ていました。A氏はお風呂が好きで入院前はスーパー銭湯によく行っていたそうで「歩けるなら歩いていきたい」と願いを話されていました。またA氏に困っていることを聞くと「ない」と話されていました。それを聞き私たちは入院生活の中で困ったことはないと思っていました。しかし、リハビリの話をしているとき、体を動かさないもどかしい気持ちが伝わってきました。そこから、会話や仕草、表情から不安や願いを汲み取る大切さを学びました。A氏を通して患者さんは「今よりもっとよくなりたい」「回復したい」という思いや願いを持って頑張っていることを知りました。患者さんが願いに近づ

けるように私たちに何かできることはないか考え応援をしていくことが大切と学びました。

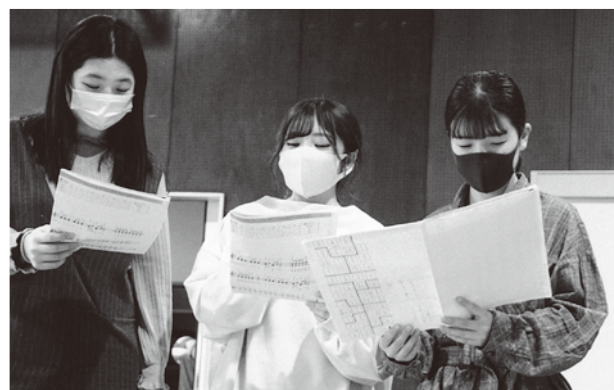
90代男性のD氏は橋部脳梗塞により入院された方でした。D氏は幕末に起こった生麦事件、明治学院を作ったヘボンさんのこと、日本の高圧ガスの歴史や、D氏が頑張ってきた仕事のことなど終始笑顔で話してくださりました。D氏は認知機能の低下があるとのことで、話を何度も繰り返すこともありましたが、話が繰り返されるたび相槌を打ちながら聞きました。初めての経験だったため、私たちのしていることが本当にD氏のためなのかとても不安でしたが、D氏がとても楽しそうにお話してくださるので、私たちも心から嬉しくなりました。何度も同じことを話していたというのではなく、何度も何度も同じことを私たちに話してくれたのではないかと感じました。D氏は話の内容が壮大になり現実と想像がごちゃ混ぜになっていると感じる瞬間がありましたが、

それは無意識のうちにD氏を“認知機能障害をもったD氏”という枠にはめて捉え、勝手に自分の解釈で感じていることだと思いました。D氏の想像の世界だと思っていた内容は、調べてみると実際に似たようなことが起こっていました。これらのことから、わからないと決めつけないこと、否定せずその患者さんにとってのありのままを捉えることが大切だと学びました。

私たちは、患者さんを病気の人、身体が弱い人、心に傷がある人、幸せでない人というような印象があり、医療者や看護師が病気を治すと思っていました。しかし、患者さんは病気と闘いながら、回復に向けて治療やリハビリを頑張っていました。その姿をみて、私たちも頑張ろうと思いました。また、生き方や、人生を教えて頂き学ぶことが出来ました。これまでの学びを土台に、患者さんから学び続け、願いや回復を応援できる看護師を目指し、26期生全員で目標に向かって頑張っていきます。



生命活動の学び



ハンドベルに向けての練習

学生と 共に歩んだ一年

2年生

25期生

担任

菊池静華

廣澤絵美瑠

福井慶子



25期生集合

新型コロナウイルスの影響によって、2か月の休校期間があり、オンラインでの学びから始まりました。

生命活動では、人間誕生・骨筋・呼吸器・循環器・免疫・内分泌・脳神経・消化器の8つの系に分かれてグループワークを行っていききました。各系はつながりのないものだと思っていましたが、学びを共有すると8つの系が繋がり、初めて生命が維持できているのだとクラス全員で学ぶことができました。また、東葛祭での学びの発表で、生命活動の免疫グループの発表を行

うことで振り返りができ、さらに免疫細胞の構造や役割について深めることができました。自然免疫では第一段階として、外界と接する皮膚や粘膜が、病原体などの異物の侵入を未然に防ぐバリアとして機能しています。その後、食細胞による非特異的防御が行われます。自然免疫で処理しきれなかった異物にはより強力な獲得免疫が働きます。獲得免疫は学習、適応、記憶する能力に優れ、効率的な防御を可能とします。抗原が体内に侵入してからどのような流れで処理するのかを学ぶことができま

した。さらに、新型コロナウイルスについても勉強していきました。新型コロナウイルスはインターフェロンの放出を抑えるはたらきがあります。そのため、感染者は自身がウイルス感染していることに気づかないことが多く、感染者でも症状がない・軽い段階で他者に感染させるリスクがあるということを学びました。学んでいく中で、新型コロナウイルスについて様々な情報があり、正しい情報を理解することに苦戦しました。今現在も新型コロナウイルスの感染が拡大している中、今後医療者と

なる私たちがどのような行動をするべきなのかを考え続けていきたいと思います。

感染対策を十分にいき、成人1実習に臨みました。今回の実習は、生命活動の学びを土台にし、患者さんの願いを聞き応援に繋げていきました。

A氏は80歳代前半の女性で、腰椎圧迫骨折にて入院している方であり「早く退院したい」という願いがありました。普段からコルセットを使用していた生活でしたが、トイレや起き上がり時にコルセットをはずしてしまうことで、重力によって骨折部位が悪化してしまうことが考えられたので、パンフレットを作成しコルセットの重要性を患者さんと一緒に学びました。一緒に行うことで新たな骨折の予防につなげる看護応援ができました。患者さんの願いを聞き、入院中だけでなく退院後の生活も見据えた応援をすることの大切さを学びました。

在宅看護論実習では、患者さん1人をグループで受け持ちました。乳がん末期・喘息を患った50歳代後半の女性を受け持たせていただきました。20

歳代から公害喘息と認定され、40歳代に乳がんを発症し、治療を行いましたが、再発し現在乳がん末期と診断された方でした。「外に出たい。」という願いがあるものの、在宅酸素3.5L投与、移動は車椅子であったため、外出することが難しい状態でした。患者さんの願いを叶えるために、病態をグループで深め、実習中3回車椅子で外出をすることができました。外出時は酸素4L投与となり、癌の末期状態、喘息があり免疫機能が低下で、微細なウイルスの感染でも命に関わってしまうことが考えられるため、感染予防に気をつけなければならないと、病態を理解し学ぶことができました。看護師としてケアを行うことも大切ですが、一緒に外出をし、お買い物や散歩をして楽しい時間を一緒に過ごすことも看護であると学びました。在宅では訪問看護師だけではなく、家族が介護を行うため、家族の負担が大きくなってしまいます。そのため、看護師は利用者だけでなく、家族への精神的なケアを含め、支えていくことが必要であると学びました。その人ら

しく趣味や生きがい、家族の思いなど尊重して生きるために在宅療養を選択されている方が多いと学ぶことが出来ました。

老年実習では、70歳代男性で、糖尿病性腎症が進行した末期腎不全の方を受け持ちました。腎不全による皮膚の掻痒感があり、さらに透析治療を受けているため皮膚の乾燥が著しい方でした。皮膚の状態を改善させるため、重曹を使用した清拭、保湿を行うことで、受け持ち当初と比べ皮膚の状態が改善しました。また、掻痒感から皮膚を掻きむしる様子が見られることからミトンを使用していましたが、手指の可動域を保ちながら傷を増やさないために軍手を使用した実践をしました。今回の実習を通して患者さんの願いに添った看護応援を行うために、患者さんの病態を理解し根拠をもち、看護に取り組む大切さを改めて学ぶことができました。

2年次はコロナ禍により、制限された中での学びでした。3年次もまだまだ制約が続くと思いますが、患者さんからしっかりと学んでいきたいと思っています。



演習（今年は人数制限をしながら実施）



地域フィールドの学び

学生と 共に歩んだ一年

3年生

24期生

担任

富田智恵

高田澄子

保科時子



研修旅行 多磨全生園にて

私たちはいよいよ国家試験を迎えるという緊張感の中、4月に3年生になりました。新型コロナウイルスが感染拡大し、それに伴い5月末まで休校になりました。この状態で「卒業できるのか」「国家試験は受けられるのか」不安な気持ちでいっぱいでした。

6月から学校が再開し、通常より短縮された在宅・老年実習となり、2週間での実践ができましたのだろうと思うこともありましたが、老年実習では癌終末期の患者さんを受け持ち、終末

期の看護ではその人らしい最期を応援していくために大切だと感じました。さらに、その人らしい最期を迎えてもらうためにはその患者さん自身の人生を知らなければならず、患者さんの生活史を知ることの大切さを改めて学びました。

研修旅行はコロナ禍で、宿泊を伴う遠方の旅行は難しく、クラスで何度も話し合いを進

めた結果、住み慣れた地域の歴史や戦争の爪痕を学ぶことになりました。戦争は人間として生きる当たり前の権利を簡単に奪ってしまいます。平和と対極にあ



東京都復興記念館関東大震災被害の展示

る悲惨な戦争の過ちを二度と繰り返さないために、歴史を学ぶ必要があると知りました。今後人間の尊厳と生命に直接関わる医療者として、歴史の事実を正しく知る必要があると強く感じました。

総合実習では、階段から転落し徐々に食欲不振、体動困難出現し、救急搬送され熱中症・脱水となり入院された70歳代後半の男性を受け持ちました。E氏は熱中症・脱水の治療が終了してもなお約2か月間の長期入院をしていました。最初はE氏の入院期間が長期化しているのはADL回復のためだと思っていました。しかし、それだけではなく、同居している40歳代後半の長男は10年以上失業中でE氏の身体のことを気にかかる余裕がなかったことがE氏の生活背景から分かりました。E氏はこれまでも転倒を繰り返していましたが、病院の受診歴はなく、経済的に困窮しながら生活を送っていた事実が今回の入院を機に表面化しました。

家族がいても地域から孤立する現実を目の当たりにしました。このような事例から、SDH（健康の社会的決定要因）の視点で患者さんの社会背景を捉える大切を研究を通して学びました。

3年間の実習で回復する患者さんの姿や頑張りから多くを学び、どの患者さんも病気に至った背景を見ていくと生活しやすい社会ではないこと、生活と労働そして健康の社会的決定要因がつながっていると学びました。私たちは誰もが自分らしく安心して生活するにはどうしたらいいのか追求したいと思い研究してきました。

北欧では実現可能となっている社会保障が、日本では新自由主義や社会保障・税一体化改革などにより「自己責任論」が根付いているため、憲法が正しく行使されていないと知りました。憲法にある「基本的人権」は「その人らしい生活」を送ることを保障しています。現在の日本は、権力を濫用しないように制定された国民のための憲法のはずで

すが、その権利が護られていませんでした。これらは、日本の政治への関心の低さが問題であると感じました。私たちもこの学校で学ぶまでは、自分たちの意見が反映されないように思い、政治から目を背け日本社会の全体像が見えていませんでした。しかし今、患者さんの事実をありのままに捉えることで、人権が護られていない社会になっていることに危機感を覚えました。

憲法12条では「国民に保障する自由及び権利は、国民の不断の努力によってこれを保持しなければならない」とされています。今まで国や政府という大きな存在に対してあまりにも自分の存在が小さく無力だと思って行動できませんでしたが、先人が不断の努力により作り上げた社会保障制度をこれ以上後退させてはいけないと思いました。これから医療者として人々の健康で自分らしく幸せに生きる権利を護るため、一国民として不断の努力で私たちの憲法を護り続けていきたいです。



国試対策講座①



国試対策講座②

第26回 東葛祭

2020年9月18日に『コロナ禍の今を生きる～夢を追いかけて続ける私たち～』というテーマで東葛祭を行いました。今年は新型コロナウイルスの影響で授業の再開が遅くなり、実習の中止や期間の短縮、例年通りの学びが出来ず、不安がありました。また世間ではコロナ世代と呼ばれてしまうような現状があり、その逆境に屈しないという思いを込めこのテーマにしました。

例年は食事処やフリーマーケットなど二日間に分けて地域の方にお越しいただき、交流してきました。しかし今年は新型コロナウイルス感染防止のため、外部公開せず学びの発表のみを行いました。学びの発表では、各学年の学びを共有しました。1年生は運動負荷実験について、2年生は生命活動の免疫について、3年生は在宅実習について発表しました。特に2年生の発表では、新型コロナウイルスについての内容も含まれており、感染防止対策に繋げる学びとなりました。また平和ゼミナールがwebの原水禁での学びを報告し全学年で共

有しました。学年の垣根を越えて積極的な意見交流が出来ました。しかしZOOMでの発表だったため音声やカメラの調整などで今後の課題となりました。

講演会では武本匡弘さんをお招きし、『海から見る地球～地球問題と平和について考える～』というテーマで講演をしていただきました。プラスチックが温室効果ガスの25倍ものガスを海中で排出していることを知り、普段当たり前のように出しているペットボトルなどのプラスチックが地球温暖化問題に深く関係していることがわかりました。地球温暖化の影響で北極の氷が溶け、海水温の上昇に伴う海面の上昇が起これ、国をも失う危機に陥っていることにとっても驚かされました。また、世界の海でサンゴの石灰化が進行し美しい海の景観が奪われている現状があることを知りました。プラスチックは今までリサイクルができる環境にやさしいものだという認識を持っていましたが、実際にリサイクルされているのは約3割であり、約7割が

リサイクルされずに燃やされ、多くのメタンやエチレン、二酸化炭素の排出に繋がっていることを学びました。プラスチックの使用を減らすためにマイボトルやエコバックを利用することが大切だと思いました。

講演を通し、人間の生命活動は自然と共に営まれ、私たちは自然に生かされているのだと再確認しました。自然と共存していくためには私たち一人一人が環境問題に目を向け、自然を護るために行動していかなくてはならないと決意しました。

今年は3密を避けて楽しめる企画を学生が主体となって作り上げました。テーマは『東葛Before After』で内容は各クラス代表者をメイクやコーディネートで変身させ、変身前と変身後を1つの動画にまとめてZOOMで共有しました。企画を通して学生だけでなく教員も参加して盛り上がり、東葛祭は大成功をおさめることができました。

東葛祭実行委員長3年
榎本真帆

平和ゼミナール

原水爆禁止 2020 世界大会（オンライン）に参加して



私たちは今回原水爆禁止世界大会にオンラインで参加しました。新型コロナウイルスの影響で今年は広島に行くことが出来ませんでしたが、広島・長崎の被爆者の方々のお話だけでなく、ベトナムの枯葉剤や沖縄の軍地基地問題などのお話を聞き、世界にはさまざまな問題が起きており、今現在も苦しみ続けている人がいるということを知りました。

ベトナムの枯葉剤の問題について、私たちは全く知りませんでしたが、枯葉剤に含まれているダイオキシンが人体に大きく影響を及ぼしその影響は第3世代にまで被害が続いていました。

現在、戦争での被害を受けているのは人だけでなく海などの環境にも影響を及ぼしているということを、東葛祭の講演会で武本さんから聞かせていただきました。私たちが日常で使用しているペットボトルなどのプラスチックごみが年間800万トンも海に流れ込んでいま

す。そのごみの多くは石油でできているため、プラスチック製品を全世界で使用しなくなれば、石油の争奪戦がなくなると聞き、戦争と環境汚染は別問題ではなく、密接な関係性があるのだと知りました。戦争が招くものは私たちの命だけでなく、地球の環境にも大きな影響を及ぼすつながりました。

沖縄の特別集会では長瀬和男さんの発言から「日本政府が沖縄の土地を強制的に借り上げ、米軍に提供する提供施設になり、日米地位協定によって県民の人権以上に米軍への特権待遇を重視された。」と聞かせていただきました。新基地建設に対したくさんの県民が反対しているにもかかわらず、建設が強行されており民意の尊重がされていないということが分かりました。沖縄県民だけの問題だけでなく日本全体の問題として、若い世代の人たちも政治に参加していき民主主義を育て問題を解決していかなければいけないと思いました。

広島デーでは山田寿美子さんの発言から「私たち被爆者にとっては1945年8月6日、9日の原爆投下後から今もなお被ばくによる影響で病気になるのではないかとずっと不安で生活しています。子どもや孫にも影響があるのではないかという不安もあります。核被害を一生持ちづけることが核兵器の怖さです。」と話され、改めて核兵器の恐ろしさを実感しました。

原爆投下から75年が経ち、現在84か国が署名し批准国は50か国に達しました。1995年に原水爆禁止世界大会が開催されてから65年間、被爆者の方々が核兵器廃絶に向け平和行進をし続けたことで公正で平和な世界へと近づいていっていると感じました。2021年1月22日に核兵器禁止条約が発効します。日本は条約に署名していませんが、戦争が起らないようにするために私たちが悲慘さを次の世代へ伝えて行動していく事が重要であると思います。

23期自治会活動紹介

私たち東葛看護専門学校自治会は、勤医会東葛看護専門学校の学生として「患者の立場に立つ看護」を学ぶという本来の目的を達成するために、学生の学習環境の改善や生活を護りたいと流山市の給付型奨学金制度や今のコロナ禍での学生の困窮を改善したいと活動してきました。

2017年にアルバイト調査を行った結果、経済的事情からアルバイトせざるを得ない状況にある学生が多数いることが分かりました。2019年もアルバイト実態調査を行い、前回よりもアルバイトをしている学生が増え、学業への支障が出ているという回答が10%増えていました。そのため、給付型奨学金制度のための署名活動を行い、全国から8690筆の署名をいただくことができました。その結果2020年2月に「流山市看護師等就学資金貸付制度」が制定されました。当初、対象者は20人とされていましたが、今年度は様々な方の協力があり24人の申請が通りました。しかし、一

年ごとに更新しなければならないことや給付金が少ないこと、対象人数が少ないことなど流山市看護師等修学資金制度の使いづらさがあると考え、全校生徒の意見を聞くため流山市看護師等修学資金についてアンケートを12月に行いました。その結果、制度についてよくわからないとの回答が多く、制度を利用できる条件（流山市民でなくても流山市内の病院に就職すれば制度を利用できることなど）が知られていないことが分かりました。その為、今後はたくさんの方に知ってもらう必要があると思い、インターネットやチラシの掲示などで学内外にも広めていく活動を行っていききたいです。

さらに、今年度は新型コロナウイルスの感染拡大によって私たち看護学生の生活も大きく変化がありました。4月に行った「コロナに関する学校生活への影響アンケート」では、71人中40%の人が「収入が減った」と回答しており、今までアルバイトの収入を何に使っていた

か（複数回答可）という質問に対し75人中40%の人が生活費に、また30.7%の人が学費に充てていたという結果となりました。この結果から、新型コロナウイルスの影響で収入が減ったことにより、生活費や学費に充てるお金が無くなってしまい生活が苦しくなっている現状を知ることができました。

民医連が全国の奨学生に対し実態を把握するためにアンケートを実施しました。コロナの影響により家族の収入が減り、親から受けている経済的援助が減少していました。また、アルバイト禁止で生活と学業に困難をきたしている学生も多いという結果がでました。東葛看護専門学校に記者会見の機会をいただき、そこで私たち学生自治会が動画で思いを発信させていただきました。

今年度は新型コロナウイルスの影響により、思うように学校生活を送ることができていませんが、学生がより良い学校生活を送れるように日々活動していきます。



新任のご挨拶



大井 涼

2018年5月より着任いたしました大井涼と申します。私は、2007年に東葛看護専門学校を卒業後、東葛病院で働いてきました。着任初日、不安と緊張でいっぱいでしたが、暖かく迎えてくれた学生に今も感謝しています。異動となり約3年が経ちますが、自分に続けられるのだろうかと思うことが何度もありました。しかし、いつもそんな自分に、もう少し頑張ろうと思わせてくれたのは学生でした。ひとりひとりが自分と向き合い、それぞれの思いを持ちながら看護師への道を歩む一瞬一瞬の時や眼差しに支えられてきました。これからも人間とは、看護とは何か、学生と共に学ばせてもらい、学生から学んでいきたいと思います。



廣澤 絵美瑠

久々に戻ってきた母校は、緊急事態宣言による休校で静まり返っていました。学生の登校が始まると、学校は活気に満ち溢れ、本来のあるべき姿を取り戻し、学生の持つエネルギーを感じました。臨地実習で学生達は患者さんと向き合い、病態を学びます。レポートを作成する中で、病態を深め、自分自身と向き合っていきます。その成長過程を間近で感じ、目頭が熱くなることが何度もありました。また、私自身も学ぶことの楽しさ、喜びを実感でき、この学校で学生と共に、患者さんの人権擁護の立場に立った看護を行うことができるように学んで行きたいと思うようになりました。セキセイインコが好きなので写真がある人は是非見せて下さい。



保科 時子

7月に着任になりました。1科10期生で卒業後、代々木病院で勤務していました。まさか教員として学校へ戻ってくるとは思ってもおらず、そして、自分が教えて頂いた先生方と仕事をするのはとても不思議な感じで、学生に戻った気分です。病棟で実習指導者として学生と一緒に実習するのは楽しいと思っていました。しかし着任後、病態と一緒に学び、教科書を開くとあれもこれも覚えていない…いかに経験値で業務をしていたか思い知らされる毎日です。また、あの患者さんの退院支援はあれでよかったのだろうかなどと振り返る毎日です。明るく元気いっぱいのみなさんと共にこれからまた楽しく看護を学んでいきたいと思っています。よろしくお願いします。

コロナ禍で守り発展させたい「東葛看護学校の教育」

勤医会東葛看護専門学校 副校長 山田 かおる

2020年1月新型コロナウイルス感染症が世界的に感染拡大し始めました。卒業式縮小・中止が叫ばれはじめるなか、「3年間頑張ってきた23期生の卒業式を出来るだけ今まで通り行いたい、一緒に学んできた在校生も参加してもらいたい、見守ってこられた保護者には晴れの姿を見てもらいたい。」という思いを教職員で意思統一しました。感染予防をしながら最大の規模で行う卒業式に向けて、内外の打ち合わせをして取り組みました。参列者への感染予防対策の徹底・参加者数の決定、定期換気の計画、そして主役23期生の決意表明・3年間の映像上映・「証」合唱45分間は最大の時間を保障しました。「人権を護る看護師になる」力強く決意表明した23期生37名は卒業していきました。23期生と戸澤担任にあふれた涙には、苦勞を乗り越えた喜びが溢れていました。3月18日在校生は2019年度予定していたすべてのカリキュラムを終え、春季休みを迎えました。

【臨時休校期間の取り組み】

1) 紙面学習から動画作成そしてオンライン授業の立ち上げまで(4～5月)

パンデミックに至った全世界への感染症の広がりや日本の感染症対策、文科省・厚労省からの学校教育に係る指針さらに千葉県や東葛地域の現状を分析し東葛看護学校の方針を決定し進めてきました。当初春休みから4月1か月強を臨時休校、始業はゴールデンウィーク明けと決定しましたが、4月16日

全国に緊急事態宣言が拡大され5月末までの臨時休校延期を決定しました。休校中も学びを止めないために、学年ごとの学習課題を検討して郵送で発送しました。1年生は入学式も迎えられないなかで、感染症への学びを進めるための学習文献と、自分の思いや考えを記述する課題を提示しました。2年生は「生命150億年の旅」を読む春休み課題、そしてグループ学習課題を提示して生命活動に取り組みました。3年生は国家試験学習の取り組みを始めました。学生へのお知らせはメールメイトを活用しながら行ってきましたが、一斉に多くの情報を正確に伝えるために、ホームページに「学生専用」ページを立ち上げ活用を始しました。一方、緊急事態宣言で外出を制限されるなかで、学生たちは元気でやっているのか、どんな思いでいるのか思いを馳せていました。今まで賑やかだった学校が、学生のいない空虚な建物に一変してしまいました。郵送やホームページからの配信という一方向の発信ではなく、双方向の関係をつくりたい。不安を抱える学生を励ましたい。そのような思いから動画の作成を始めました。3年生は最も心配をしているだろう国家試験の学習動画を作成。全教員が問題の解説を行い、国試を応援する教育活動を始めました。私たちは、動画の準備を通して教材研究が広がり、撮影場面を見ることで研究授業となり学び合う場にもなりました。動画作成に取り組んでいたいた外部講師からも、「初めて

の動画作成を通して、90分の授業内容を精選する取り組みになり授業を見直すよい機会になった。無駄な言葉や重複があった」とのコメントが寄せられました。さらに、長期の休校で自粛を強いられる学生にむけて、教職員でハンドベル演奏・自己紹介動画作成等にも取り組み、学生への励ましを送り続けました。仕事の合間に、教職員14名全員で「世界に一つだけの花」を練習しました。初めてのことばかりで疲労している教職員にとって、心一つに音楽を奏でることは癒しの時間にもなりました。さらに、オンデマンド式の動画授業の配信と同時に、ライブ式によるオンライン授業に向けた研究に取り組みました。情報収集とオンライン授業への研究と同時に全学生への学習環境のアンケート調査を行い、ほぼ学生全員がインターネット活用した授業が可能と判断しました。準備が整わない数名の学生には、学校内に学習環境の保障をしました。

2) 初めてのオンライン授業

zoomを活用したオンラインHRに向けて準備を進めました。操作に慣れるための教職員同士の練習、必要機器の設定、HR内容と方法の検討。学生一人一人との継続テストを数日にわたって行い環境設定を一緒に行いました。そして5月22日(金)ドキドキのオンライン



Web の授業



Web で HR

HRでした。2・3年生は2か月ぶりに画面越しでも仲間に出逢えたことに、喜びが溢れていました。どんな思いや状況で休校期間を過ごしてきたのかをクラス全員で交流しました。一方1年生は初めてのHRが画面越しになり、表情は硬く緊張が伝わってきました。しかし自己紹介を行いクラス全員と顔を合わせることが出来、終了頃には少し緊張もほぐれ安堵していることが伝わってくる学生もいました。その後、オンラインGW・オンライン授業に取り組みました。さらにインターネット教材「ナースিংチャンネル」の無料視聴トライアルをしました。1年生への生理学(生命活動)をzoomによるライブ授業、2年生は生命活動をオンラインGW、3年生は4月に開講の在宅看護論・老年看護総論・看護技術穿刺をライブ授業で行いました。オンラインではありましたが、「仲間と会えて話ができてうれしかった」「学びを仲間と共に行えてよかった」、そして「学校へ行きたい」という多くの声が寄せられました。教職員にとってはシステムの立ち上げ、対面ではなく機器使用を介した短縮授業で、学びの内容の選定から教授方法に至るまで、授業のつくり直しが必要でした。効果的な授業をどう作り上げるか、手探りで授業が続きました。しかし数カ月自宅での自粛生活を行ってきた学生にとって、オンラインで仲間や教員と繋がれたことは、

郵送や動画配信にはない双方向の環境を作れ、「仲間と繋がる」場として大変有意義でした。自宅で学習できることは、感染のリスクを下げることが出来る安心に繋がったと思いますが、一方インターネット環境が全学生同様に揃わない大きな課題と自宅だから学習に集中できない(家庭環境等により)という現状も明らかになりました。

【学生全員が学校に集った！学校が始まった】

6月1日には全校と教職員による入学と始業の集いを行いました。今年度初めて全学年が集う会を行い、新入生26期生を迎えることが出来ました。感染対策として3密を避けるために、座席の距離を1.8mとり換気を行い、時間を短縮した今年度初めての学校行事となりました。26期生は緊張しながらも堂々と本校の学生として集いに参加し、在校生から暖かく迎えられました。また教職員からのサプライズハンドベル演奏には学生たちから笑顔や笑いが溢れる機会になりました。感染対策を行いながら今年度の学内での学びのスタートを全校で行えたことは、節目となり東葛看護学校の一員であるという自覚が生まれ、学生教職員がともに歩む本校らしい取り組みとなりました。

3年生は臨地実習を控えて他学年との接触を極力さけるために教室を講堂に設置し、1年生第1教室・2年生第5教室で、机の距離を1mとって配置しました。朝と夕方の通学・通勤ラッシュをさける時差登校から始めました。さらに、4月から始めた健康観察表を登校時に持参して、教員が検温と問診に

よるトリアージを行い、健康上の課題がない学生のみが授業参加にしました。発熱時は校医と相談しながら判断。法人のガイドラインを元に東葛看護学校のガイドラインを作成しました。学生から朝相談の電話が入り、登校前に相談をして登校の判断をすることが周知徹底されていきました。臨地実習においては、実習場の責任者と感染予防対策の規定をつくり準備を進めていきました。実習時は教員が必ず朝実習場にいき、健康観察をして実習可能かどうかの判断を行いました。体温は1日4回検温表へ記入し提出、個人用感染防御具のゴーグル着用・消毒・手洗い・必要時ビニールエプロン・不織布マスクを着用しました。発熱者は受診を義務付けPCR検査対象かどうかを必ず確認をして、校医と相談しながら判断し、コロナ感染者を1名も出さずに予定した全ての実習を実施することが出来ました。

【学生とともに取り組んだ感染予防対策】

感染予防対策の中心は、学生の厚生保健委員会と学校感染予防対策教員(3名体制)が、感染症対策づくり・備品準備・環境整備を学生と学習・検討を行い運営してきました。

換気と間隔を開けた教室の整備、1方向で食べる食事会場の準備、廊下・トイレ等で密にならない同線づくり、昼食と夕方の清掃と消毒方法を確立していきました。始業後は連日厚生保健委員会を開



朝の健康チェック

催し(厚生保健・4役・自治会による合同会議も含め)、夕方には教職員による振りかえりを連日行い、1か月かけて方法を修正しながら、学生委員会とともに感染予防対策をつくり上げてきました。3年生を中心として本校らしい組織的な活動を、学生を中心に行っていました。活動をとおして3年生の自覚と責任が育まれ、3年生から1・2年生が学ぶ会議にもなっていました。6月半ばごろからは、学生の厚生保健委員会の成長の場になるよう、学習に注力してきました。6月末からは非接触型の体温計を使用しながら学生による検温観察システムをつくりました。

【看護学生の経済的基盤をつくる活動】

コロナ禍でアルバイトが大幅に制限され、さらに保護者の経済状況の変化のなかで、学びを保障する基盤となる経済的支援に事務を中心に学校全体で取り組んでいきました。学生自治会とともに実態把握のためのアンケート調査も行い、4割の学生が経済的に困難を抱えたことが明らかになりました。

「文科省学生支援緊急給付金」では、アルバイト減収・中止など困難な学生に対して学校に配分された予算枠すべてに対して申請を行い、申請者22名全員が受理されました。さらに、「流山市学生応援給付金」は全国に先駆けて流山市が取り組んだ制度で、年間授業料1/2を保障するもの、前期1名後期2名が受理されました。また、5年かけて取り組んでいた流山市給付型奨学金制度は、申請者24名全員が受理されて給付が始まりました。陳情活動・署名活動が制度制定そ

して実施へと画期的な取り組みとなり、「行動すれば社会は変わる・変えられる」を体験的に学び、社会変革を推し進めた学生そして学校の大きな財産になる取り組みでした。さらに、学生にとっては明日・人間・社会への信頼につながる学びでした。

【コロナ禍で保障していただいた臨地実習】

臨時休校と感染拡大のなかで年度予定は大幅に変更をしましたが、本校の設立法人である東京勤労者医療会そして共同事業である船橋二和病院で、予定した実習を実施することが出来ました。

3年生の在宅看護論では、終末期にある患者さんの限られた時間を人間らしく豊かに生きる応援を臨床と協同して行った実践、そして利用者さんの最期まで力強く生きる力に励まされる実践も多く、本物の学びでした。この時期に臨地実習を保障していただき学生の実習に期待をして託して頂けたことは、臨床とともに歩んできた25年間の教育実践上にあると思います。このような時期だからこそ、学生の健康管理を学校は責任をもって行い、病院への過剰な負荷をかけない実習指導体制に注力しました。しかし3年生最後の総合実習では、予定病院でコロナ陽性者が出てしまい臨地実習の受け入れが不可になりました。討議を重ね、教育理念に基づき「患者さんの事実から出発し、事実学ぶ」ために、模擬事例・模擬患者そしてシュミレーターではない学内実習をすることを決めました。3年次に受け持たせていただいた患者さんの実践をもう一度検証をして、卒業論文まで学びを



厚生保健委員会

深めていく「学内実習」をつくり上げていきました。病態を学びなおし、実践してきた看護が本当に患者さんの人権を保障する看護技術であったのかを検証した「看護技術ゼミ」、退院後の自宅・施設訪問、ケースワーカーや医療事務からの講義をとおして生活と労働の場面から患者さんを捉えなおし、3年間の総仕上げとして卒業研究に取り組みました。「患者の人権擁護のために、仲間とともに闘う覚悟」が出来たと綴った力強い決意は、コロナ禍だからこそ命と健康を守る社会を自らが創っていくという覚悟でした。見事な卒業論文に、学生たちの存在は「希望ある未来」と感動に震え、学生とともに学べたことに感謝が溢れました。コロナ禍で方法は変わっても、教育理念を貫いた2020年度の教育実践を体現した卒業論文ゼミナールになりました。「困難な時には困難よりもっとおおきくなってやる」と卒業式で学生たちにエールを送った故三上満校長の言葉を思い出し、コロナ禍だから仕方ないと縮小するのではなく、大切にしてきたことを貫くことで新たな教育へと発展することを確信しました。

ようこそ先輩

1科15期生 田地野 君子

子供3人育てながらの学生時代は、実習だけでなく繰り返されるグループワークや、季節ごとの行事にボランティア活動、国試に取り掛かれたのは卒論が終わった1月で、試験勉強はいつすればよいのかと何度も思いました。

臨床現場に入って思うことは、病気になると人の生活は一変します。病気と一緒に生きていく事の大変さ、命の選択を迫られる家族の苦悩、患者さんや家族の思いは個々に違い一つ一つ聞き取り共有して看護に繋げることは難しく悩むことも多いです。スタッフの意見が違うことも大切で、繰り返しカンファが行われ方針が決まります。学生時代に繰り返し行ったグループワークの大切さ、先生方の温かく強い眼差しは私たちへの未来への応援だったことを今実感しています。

今コロナ禍で実習が中止になり先の見えない学生生活を送っていると思いますが未来は必ず来ます。どうか皆さんも日々の勉強、仲間との時間を大切に頑張ってください。看護師の仕事は失敗も成功もすべての経験が自分の力になる楽しい仕事です。これから学生さんが学びを得ることができるよう応援しています。



学生の時苦労して育てた子ども達も今は頼れるお父さんに成長しました。大好きな孫に癒されています。

2科15期生の千葉真由美です。

東葛看護学校を卒業してからは9年経ちます。学生時代は授業や実習などに追われる毎日でしたが、振り返ると充実した学校生活でした。臨床指導者や先生方が些細なことにも相談に乗ってくれるため、とても心強かったです。

東日本大震災の起きた2011年に卒業し、看護師として10年目を迎えます。卒業後は我孫子わかくさ訪問看護ステーションに着任になり、ステーションの名前が変わりましたが今年で10年目になります。

在宅は利用者さんの生活の軸を高め、自宅で生活される「喜び」を一緒に味わうことが出来るのが魅力の一つです。「年をとっても、障害があっても、認知症になっても、1人暮らしであっても経済的な事情に関わらず、住み慣れた地域で、当たり前暮らし続けていくことを支援する」をモットーに今後も働き続けていきたいです。

コロナ禍での学校は大変ですね。3年間はあっという間で、実習や試験などで追われる日々だと思います。看護師になってからも現場で学ぶことはたくさんあります。患者さんのそばに寄り添うことも看護であると日々感じています。同級生や先生方、さらに患者さんなど色々な人と出会うことができる環境の中で、今後同じ看護師として一緒に働けることを楽しみにしています。学校を卒業したという自信が看護師人生に必ずプラスになると 생각합니다。



2科15期生
千葉真由美

編集後記

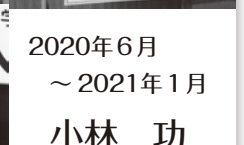
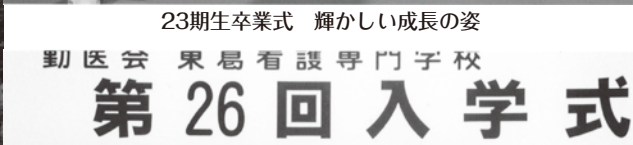
コロナ禍の「禍」は「か」と読み、「災い」や「災難」「不幸なできごと」を意味する言葉です。緊急事態宣言から1年、学生の学びの保障に日々奔走してきました。

授業、実習はもちろん入学式、ナーシングセレモニー、オープンキャンパスなどの学びは東葛看護学校の宝です。出来ないのではなく今の情勢を踏まえ何が出来るか教職員一同で考え、学生との共同で創りあげました。3密を避け、短縮行事にはなりましたがすべての行事を行うことができたことを誇りに思います。中でも実習病院がコロナ禍

のため中止せざるを得ませんでした。そこで3年間の集大成である総合実習を技術ゼミや今までの事例を卒論研究へと変更しました。病態を振り返り、看護技術の創意・工夫そして発展させた技術は貴重な学びの時間になりました。ゼミナールではどの学生も「願いを応援する」とは「その人らしく生きることを応援する」であり、「人権を守る」に繋がったと意見を述べています。これからも社会に貢献できる看護師として大きく羽ばたいていくでしょう。

編集委員 高田澄子

キラリ 学ぶ青春



23期生卒業式 輝かしい成長の姿
勤医会 東葛看護専門学校
第26回入学式

2020年6月
～2021年1月
小林 功
モノクロ写真館



待ちに待った入学式 感染対策もバッチリ



患者さんから学び続けたいを応援できる看護師を目指します



勤医会東葛看護専門学校

編集・発行 勤医会東葛看護専門学校
〒270-0174 千葉県流山市下花輪 409
発行責任者 校長 窪倉 みさ江

TEL.04-7158-9955 FAX.04-7159-7055